

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	「苦學生」喜劇
Author(s)	松田, 武夫
Citation	龍南, 196: 33-41
Issue date	1925-12
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/8829">http://hdl.handle.net/2298/8829</a>
Right	

# 「苦學生」

劇喜

松田武夫

人、

父、(友彦、四十三歳、)

母、(三十五歳、)

長女、(よし子、十六歳、)

次女、(とき子、十四歳、)

三女、(百合子、十二歳、)

苦學生、(實は敏夫、友彦の甥、二十一歳、)

女中、(たか、二十三歳、)

電報配達夫、車夫、

時、現代、

所、東京の郊外、

(舞臺上手に茶の間、紫檀の机、火鉢、茶簞笥等程よき所に置いてあり、壁には油繪の額が懸つて居る。襖を隔てて下手

は玄關の間に通ず。茶の間にて姉妹三人各自雑誌を讀んで居る。幕靜かに開く。

次女、姉さん。

長女、……………

次女、姉さんてば、

長女、（知らない振りをして居る。）……………

次女、（姉の持てる本を取りあげながら、意地悪。何故返事しないの？、

長女、何よう。返へして頂戴、私讀むんだから。

次女、私ね、本を讀むことを止そうと思つてゐるの。

長女、（雑誌を讀みながら）……………

次女、何故つて、本を見てゐると頭が變になるのよ。だから……姉さんは一寸も私の話なんか聞いてくれないのね。いま  
いましい。（三女に）百合ちゃん、私ほんとうは讀みたいのだけれど、讀んでるとね、

三女、（讀みながら）そう。とき姉さん面白いのよ。そらこれ御覽、こんな事が書いてあるのよ。

次女、（三女の持てる雑誌をのぞきながら）まあ、母様に云ひ附けてよ。姉さん百合ちゃんはねえ、主婦の友の家庭衛  
生相談と云ふ所を見て居るのよ。

長女、まあ、そう。あきれた人。どれ見せて御覽、どんな事が書いてあるの。

（三人集まりて讀んで居る。正面の襖開きて、母登場。三人ハツとして急いで雑誌を隠す。）

母、何してたの。百合ちゃん、今隠したもの何あに、母様に見せて頂戴。

(百合子もちもちして居る。)

母、(雑誌を見つけて取り上げながら、)之を皆で見えて居たの、これは大人の讀むものだから、あなた方が讀むものではありません。せん。あなた方には別に買つてある筈です。

三女、だつて、あれはもう、すっかり讀んでしまつたのですもの。

母、さあ御本は止めに<sup>や</sup>して、お茶でもおあがりなさい。木村屋のパンを買つて來てあげたのよ。

次女、あらいい母様ね、私トーストにしたパンが大好物。姉さんはチョコレート黨なのでせう。

長女、ひどいわ、私だつて好きだわ。

母、いいことよ、三人に同じ様に分けてあげるから。

(母、三人にパンを分配す三人は各自の湯呑を出してお茶を注ぐ。)

次女、今日誰かきつと來てよ。こんな大きな茶粕が立つたのですもの。

三女、とき姉さんのも立つたの、私のもよ、こんなに長ひよろい瘦つぽちなのが。

長女、どれ、どれ、まあ一體誰が來るんでせう。

三女、父様<sup>ちやう</sup>がお留守だからきつと誰かお見舞に來るのよ。

(この時、電報配達夫玄關に電報を持ち來る。女中取次に出でそれを茶の間に持ち來る。)

女中、奥様、電報でございます。

(女中退場)

次女、何處から來たの。

母、（読み終つて）父様が今日お歸りになるのよ。

三女、まあ嬉しい、父様がお歸りなの。おみやげがきつと澤山あると思ふわ。

長女、母様それ見せて頂戴。（電報を受けとりて讀む。）チケフカヘル、トモヒコ、おかしいわねえ、母様に向つて父だつて、オツトケフカヘルにした方がよく似合ふわ。

次女、（湯呑を持ちながら）百合ちゃんのは瘦つぽいだから父様に違ひないけれど、私のは誰かしら。

母、まだそんなこと考へて居るの。敏夫さんが来る様なことを云つて居たから、今日あたりひよつとすると来るかも知れないよ。

長女、違ひますよ母様、私きつと、この間來て押し賣した苦學生の様なものが、又やつて来るんぢやないかと思へて仕方がないのです。

次女、姉さんの唐變木。人が右と云へば左と云ふ強情つ張り。苦學生なんか來てたまるものですか。縁起の悪い。

長女、苦學生が來たら恐いからねえ。

次女、恐いものですか、姉さんがおつかないものだから、私までそう思へるのよ。私大聲で叱り飛ばしてやるわ。

女中、（正面の襖から顔を出して）ほんとにねえ、お嬢様、その時はたかも御加勢いたします。

長女、（女中に）お前はだまつといで、（次女に）震災の時は一番に泣きだした癖に。

次女、だつてあの時は特別なもの、ねえたか。

女中、そうですとも、あの時恐がらなかつたものは人間ではありませんね。たかだつて濱で工場の屋根の下敷になつた時は、もう助からないと思つたのですもの。

長女、恐くなかつたと云ふではありませんよ。一等初めに泣き出した弱虫は、ときちやんだつたと云つてゐるのですよ。

次女、でも、姉さんだつて……

母、（制しながら）もう澤山。靜かにおし、誰か玄關で呼んでる様だから。

（苦學生登場、玄關にて「御免なさい」を連呼する。女中あわてて襖を閉め取り次に出る。）

（玄關にて）

苦學生、私は日本大學に行つて居る苦學生ですが、この夏休を利用して行商に歩き、その利益を學費の一部にでもしよう

と思つて居るのですが、どうか……（一禮する。）

（茶の間にて）

次女、母様、苦學生が又來たのよ。私恐いわ。

長女、それ御覽なさい、臆病者。

母、シイツ、靜かに。

（玄關にて）

女中、苦學生ですか。ここのお家は苦學生が大嫌ひなのです。お氣の毒ですが出て行つて下さい。

苦學生、そうでもありませんが、そう云はないで、私なんかはほん物の苦學生ですから、筆一本でもよいから買つて下さい。

女中、贋の苦學生つてゐるんですか。

苦學生、居るかも知れません。そんなことはさておき、石鹼の一つでも買つて下さるわけにはいかないでせうか、この石

鹼はおちが良くて、あなたなんか顔を洗ひでもすると一邊で色が白くなりますよ。

女中、まあ、女中だと思つて人を馬鹿にして居る。奥様に云ひ附けてやるから。

苦學生、奥様にも一度お試し下さる様によく云つて下さい。効能ばかりおしやべりしたのでは、はじまらないから、ひとつ實物をお目に懸けませう。

(苦學生、風呂敷包を解きかける。)

女中、そんなものはないつてば、さつさと持つてお歸へり。只で呉れるたつて、貰ひつこないんだから。

苦學生、まあそう云はないで、只で呉れると云ふ人があつたら、文句を云はないでもらつておく方が得ですよ。

女中、知らない。知らない。知らないつてばさ。

苦學生、(きつく)お前さんは知らないつたつて、奥さんはいるかも知らないんだ。さつさと取り次ぎなさい。

女中、奥様も知らないに定つてゐる。石鹼でも何でもお前さんが持つてゐる様なものは皆、公設市場から安値で買つてあるんだよ。

苦學生、お前に俺は用事があるんぢやない、奥さんに會はして貰ひたいのだ。そう云つてくれ。

(茶の間、三人、母の周圍に集まりて居る。)

三女、母様に合はしてくれつて云つてゐるわよ。

次女、どうしませう母様。私悪い。

母、たかが上手く追ひ拂ふといいいんだが。

長女、父様が早く歸へつて下さればいいにねえ。

(支關にて)

女中、取次がなくつてもわかつて居る。さつさと歸れ。

苦學生、お前がいくら歸へれたつて歸へりはしないよ。奥さんにはどうしても取次が出来ないと云ふんだね。

女中、勿論だよ。其の必要は更に無いんだから。

苦學生、よし、お前には用はない。お前が取次がないと云ふのなら、俺の方で勝手に會ふまでだ。

(風呂敷包を持ちて上らんとする。)

女中、(苦學生を突きつけ) 家宅侵入罪で訴へるよ。馬鹿!

苦學生、勝手に訴へるよ。俺は奥さんに會ふんだ。

(苦學生、女中の制止を拂ひのけて玄關の間へ上る。)

女中、上つちやあいけない。

(茶の間では皆母にとりすかり震へて居る。)

次女、母様、入つて来るわよ。どうしませう。

三女、こわいわ。

長女、にくらしい奴。

母、静かにおし。母様が行つて静めて来るから。

(母立ちて玄關の間に行かんとする。)

女中、降りとくれ、降りろよ。

(襖に觸れる音、三人思はず躰を縮む。母立ち停る。)



女中、開けちやいけない。いけない。

(苦學生襖を開く。)

母、

三人

(同時に) まあ!

母、敏夫さんぢやないの。

三人、憎らしい敏夫さん。

敏夫、痛快! 實に愉快だ。

長女、人を騙すのもいい加減になさいよ。

次女、覺えてゐらつしやい。

敏夫、頭が悪いからね。

三女、ほんとに石鹼や筆なんか持つて來たの。

敏夫、(三女に) さあどうだか。伯母さんお久うございました。皆さんお變りも無く……

母、御機嫌よう。相變らず茶目さんね。

次女、憎らしいつたらありやあしない。あんなに濟ましかへつて。

女中、まあ私、ほんとに相濟まないことを致しまして、どうお詫してよいか……御免遊ばせ。

母、たか、あやまらなくつてもいいのよ。

敏夫、(女中に) どういたしまして、僕こそ……(包を解いて土産の品を出しながら) 伯母さんこれは誠にお粗末なものです

が、筆や石臈よりは違つたものが入つて居るだらうと思ひます。但し公設市場で買つたのでないことだけは保證いたします。

次女、皮肉屋。まあ驚ろいた。

女中、そんなことも知らず失禮なことばかり申しまして…………

敏夫、いや、何でもないのですよ。(伯母に)伯父さんと思つて鮎を持つて來ました。

母、それはどうも色々と有難う。

三女、敏夫さんは髪を延ばしたのね。

長女、いよう、生簀をつくり、文化生簀、

次女、仕返し。生簀の髪を引つ張つてやれ。突撃。

(三人して敏夫の髪を引つづる。玄關の方にてベルの音。父人力車より降りて玄關へ入る。)

母、父様がお歸りになつたのよ。

長女、父様が。

次女、まあ嬉しい。

三女、おみやげ！

(一同玄關へ向つて嬉しそうに行く。)

…………緩やかに幕…………